現の論理』有精堂一九九五年所収）

八　桜の葉が「こぼれ落つ」用例⑫については「散る」用例に含めていないが、落ちる対象として桜の花でなく葉の方を取り上げていることは興味深い。

九　『源氏物語』の桜については、禁忌の恋と結び付くという興味深い指摘もされている。原岡文子「『源氏物語』の「桜」考」（『物語研究』第二巻　新時代社一九八八年／『源氏物語　両義の糸―人物・表現をめぐって―』一九九一年　有精堂所収）

一〇　「『枕草子』の雪景色―作品生成の原風景―」（『十文字学園女子大学紀要』第四六集　二〇一六年三月）

* The Comparison with “An Anthology of Kokin-Waka Poems” and “Makura-no-soshi”
: Especially on the Description of Cherry Blossoms
** Etsuko AKAMA　十文字学園女子大学人間生活学部文芸文化学科（Department of Literature and Culture, Faculty of Human Life, Jumonji University）
キーワード　古今集　枕草子　桜　四季の景物　散る

主家の栄華を作品内に永遠に留め置いた。和歌世界では散るものとして詠むのが定番である桜をあえて散らさないことで、時間の流れを止めてみせたのである。

ちなみに『源氏物語』では「桜」の用例六十六例の中、五十例までが植物の桜を描いており、そこには、散り過ぎた桜の枝につけた手紙（須磨巻）や、春風に少し舞い散る瓶の桜（胡蝶）、咲き散る桜を詠み込む歌（柏木巻・竹河巻）なども含まれている。『源氏物語』は梅より桜の用例数が多く、内容的にも『古今集』の桜の世界を継承していると言うことができるだろう[九]。

一方、散る桜を描かない『枕草子』の場合も、『古今集』の価値を決して軽く見ているわけではない。桜満開の清涼殿を描いた章段の後半には、定子が『古今集』の暗誦テストを実施して、『古今集』の文化的権威を積極的に利用している。つまり、『古今集』の価値を認めた上で、「散る桜」に対抗することによって、独自の世界を演出したと考えられるのである。

春以外の四季の景物としては、先に拙稿[一〇]で冬の景物としての雪を取り上げ、『枕草子』では雪が作品執筆の内的動機に関係していることについて考察した。また、『古今集』においても雪は唯一の冬の景物として注目されてはいるが、他の季節、特に春秋と比較して和歌数が極端に少なく、四季の中ではあまり重視されているとは言えないことを確認した。『古今集』が重視しない季節を作品の要の場面に設定したところに、『枕草子』の対『古今集』意識が働いていると考えることも可能だろう。

今後は、まだ考察していない夏と秋の景物について、『古今集』と『枕草子』の比較検討を引き続き行っていく予定である。

注

一　日向一雅「平安文学の自然表現をめぐって―『古今集』『枕草子』『源氏物語』の政教的文学観と「陰陽の變理」を媒介として―」（『古代文学論叢十九源氏物語の環境：研究と資料』武蔵野書院二〇一一年）などが比較的近年のもの。

二　忠住佳織「枕草子の時空間―『古今集』摂取の一解釈として―」（『中世の文学と学問』思文閣出版二〇〇五年）

三　藤本宗利「空白の視点―「春は曙」の読みをめぐって―」（『むらさき』第二一集一九八九年７月／『枕草子研究』風間書房二〇〇二年所収）

四　桜の歌の続きに花が詠まれる歌が三首続き、これも桜を指していると見られるが、ここでは歌数に入れていない。配列上も散る歌の続きになっていないが、一応挙げておく。

奈良のみかどの御うた

九〇　ふるさととなりにし奈良の京にも色はかはらず花は咲きけり　　よしみねのむねさだ

九一　花の色は霞に込めて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

寛平御時后の宮の歌合のうた　　そせい法師

九二　花の木も今は堀り植ゑじ春立てばうつろふ色に人ならひけり

五　「桜」が死のイメージと結び付くのは明治時代以降であり、昭和初期の戦時に民意高揚のために利用されたことは良く知られている。近現代までの桜の文学を概観した参考文献に、小川和佑『桜の文学史』（文藝春秋社二〇〇四年）がある。

六　『蜻蛉日記』は梅が四例に対して桜の用例はない。

七　これは、『枕草子』の桜が公的場面と結び付くものであるという三田村雅子氏の指摘とも重なる。「枕草子の表現構造―「日ざし」と宮仕え讃美と―」（『中古文学』一九八〇年四月／『枕草子 表

次に、衣装ではなく本物の桜の花が大きく取り上げられる場面を見てみると、そこでも桜が栄華を演出する印象的な場面が繰り広げられていく。

清涼殿の段（用例③）は、正暦五年春の宮廷を舞台にした章段である。清涼殿の簀子に青磁の大甕が設置され、そこに五尺（約一、五メートル）もの桜の大枝が挿されていた。それは、中宮定子の立場を象徴する趣向として、父道隆もしくは母貴子が思いついたものだったろう。桜の生け花の演出は、かつて藤原良房が天皇后となった娘を桜に喩えて詠んだ和歌に準えたもので、元歌は『古今集』の五二番歌（点線部参照）である。宮廷に花開く桜は、栄華を極めた一門の象徴として咲き誇る后の桜であった。

もう一つは積善寺供養の段（用例⑭）にある。積善寺供養は関白道隆が兼家の後継者としての地位を世間に誇示する一大行事としてとらえられる。桜が植えられていたのは、中宮定子の里邸として道隆が用意した二条邸だった。二月二十日頃、桜の季節にはまだ早い時期なのに満開に咲き誇っていた桜は、実は造り物だということがわかる。桜の木を丸ごと一本、模造して庭に植えるという大掛かりな趣向を凝らして、道隆は娘の定子を待ち迎えたのだった。

ところが数日後、夜間に雨が降り始めた。造り物の桜が惨めな姿になっていくことを清少納言が心配していた時、道隆は従者を二条邸に差し向け、桜の木を引き抜いて持ち去らせた。翌朝、桜の木は跡形もなくなっており、雨で形を損なった桜の姿を白昼に晒すことは避けられたと語られる。

清涼殿の桜と二条邸の桜、『枕草子』の日記段に描かれた両場面の桜は、満開に咲き誇る見事な姿だけが描かれる。『古今集』の桜が散る姿を賞美し、それを惜しむ歌で溢れていることを清少納言が知らないはずはない。しかし、『枕草子』が描く桜は決して散らず、色あせた姿を人前に晒すことも避けられる。季節を先取りして二条邸に設置された桜は、清涼殿の満開の桜と同じく、今を時めく中宮、すなわち定子の地位を象徴するものだった。それゆえ、中関白家の栄華を描く『枕草子』においては、決して移ろったり散ったりしてはいけなかったのである。

試みに『枕草子』の中で「散り」「散る」の用例を検索してみると、全十三例を数える。そのうち畳紙や手紙などの紙類が散る用例が五例、雪が三例、水が一例、残りの四例が植物で、うち不特定の花々を指す例が二例、梅が一例、そして桜が一例（用例④）となる。梅の用例は実際に花が散った枝の用例だが、桜の場合は比喩として使われた例になる。

「散る桜」は、清少納言の宮仕え以前の章段で、かつて天皇の外戚の地位にあった藤原義懐の華やかな姿を描いた後に記される。その時、小白河院法華八講の中心にいた義懐には、数日後に失墜し出家する運命が待っていた。章段の末尾に、彼の運命に比べたら「桜など散りぬる」のはたいしたことはないという作者の言葉が述べられている。

『枕草子』で桜が散ることに触れる唯一の用例が、一時の権力者の失脚に喩えた例であることは示唆的だ。『枕草子』が実際に散る桜を描かないのは、それが中関白家の失脚を連想させるものだったから、という推論を裏付ける根拠になるのではないだろうか。

まとめ

『古今集』と『枕草子』の「桜」の用例を抽出し、それぞれの作品内における桜の扱い方とその意味について考察してきた。

『古今集』は四季の部立の内部においても時間の流れに沿った歌の配列を意識し、その中で散る桜の美を見つめ続けた。一方、『枕草子』では人々が身につけた桜襲の衣装と散らない桜を描くことによって、

なよらかなるに、…御簾の内に、女房、**桜**の唐衣どもくつろかにぬぎ垂れて、藤、山吹など、色々このましうて、あまた小半蔀の御簾よりも押し出でたるほど、……〔二一 清涼殿の丑寅の隅の〕

④ さてその二十日あまりに、中納言（藤原義懐）、法師になりたまひにしこそあはれなりしか。**桜**など散りぬるも、なほ世の常なりや。　〔三三 小白川といふ所は〕

⑤ **桜**は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝ほそくて咲きたる。……（橘は）朝露に濡れたるあさぼらけの**桜**におとらず。　〔三五 木の花は〕

⑥ （節句の人々の衣装は）めづらしう言ふべき事ならねど、いとをかし。さて、春ごとに咲くとて、**桜**をよろしう思ふ人やはある。　〔三七 節は〕

⑦ （斉信の衣装は）**桜**の綾の直衣の、いみじうはなばなと、裏のつやなど、えも言はずきよらなるに、葡萄染のいと濃き指貫、……　〔七九 返る年の二月二十余日〕

⑧ （童女たちは）**桜**の汗衫、萌黄、紅梅などいみじう、汗衫長く引きて、取り次ぎまゐらする、いとなまめきをかし。……（天皇の衣装が）**桜**の御直衣に紅の御衣の夕ばえなども、かしこければとどめつ。　〔一〇〇 淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など〕

⑨ なでしこ。菖蒲。**桜**。　〔一一二 絵にかきおとりするもの〕

⑩ 清げなる若き男どもの、主と見ゆる二、三人、**桜**の襖・柳などいとをかしうて、……　〔一一六 正月に寺に籠りたるは〕

⑪ あたらしうしたてて、**桜**の花おほく咲かせて、胡粉、朱砂など、色どりたる絵どもかきたる。　〔一四三 いやしげなるもの〕

⑫ 黄なる葉どもの、ほろほろとこぼれ落つる、いとあはれなり。**桜**の葉、椋の葉こそいととくは落つれ。　〔一八八 風は〕

⑬ 山吹の花。**桜**の花びら。　〔二一七 大きにてよきもの〕

⑭ **桜**の一丈ばかりにていみじう咲きたるやうにて、御階のもとにあれば、「いととく咲きにけるかな。梅こそただいまは盛りなれ」と見ゆるは、作りたるなりけり。……

殿（道隆）渡らせたまへり。青鈍の固文の御指貫、**桜**の御直衣に紅の御衣三つばかりを、ただ御直衣にひき重ねてぞ奉りたる。……

御前の**桜**、露に色はまさらで、日などに当りてしぼみ、わろくなるだにくちをしきに、……

（女院詮子の行列）次に女房の十、**桜**の唐衣、淡色の裳、濃き衣、香染め、薄色のうは着ども、いみじうなまめかし。……

（道隆が清少納言の着ている）赤色に**桜**の五重の衣を御覧じて、……　〔二六〇 関白殿、二月二十一日に、法興院の〕

⑮ **桜**。柳。また、青き藤。　〔二六四 狩衣は〕

⑯ 冬は躑躅。桜。掻練襲。蘇枋襲。　〔二六六 下襲は〕

⑰ 薄色。葡萄染。萌黄。桜。紅梅。すべて薄色の類。　〔一本六 女の表着は〕

⑱ 春は躑躅。桜。　〔一本九 汗衫は〕

『枕草子』には二十七例の桜の語が現れ、そのうち植物の桜を指す用例に限ると十一例（①～⑥、⑨、⑪～⑭の傍線部）に減る。そして、桜の用例の半数以上が本物の桜でなく桜襲の衣装を示していること（①、③、⑦、⑧、⑩、⑭～⑱の波線部）がわかる。華やかな桜の衣装を身に纏っているのは、道隆、伊周、清少納言を含む中宮女房たちなど中関白家の面々の他、一条天皇、藤原斉信、詮子の女房たちなど様々な人物である。また、狩衣から汗衫まで、男女の衣装の色目を集めた類聚段にも必ず桜は入っている。『枕草子』の日記段において、衣装描写は中関白家の栄華期に多く現れ、零落期に描かれなくなることを考え合わせると、桜襲の衣装の数々は中関白家の栄華を演出する要素となっていると見られよう[七]。

八六　雪とのみ降るだにあるを桜花いかに散れとか風の吹くらむ
　　比叡に登りて帰りまうで来てよめる　　つらゆき
八七　山高み見つつわが来し桜花風は心にまかすべらなり
　　題しらず　　一本大伴くろぬし
八八　春雨の降るは涙か桜花散るを惜しまぬ人しなければ
　　亭子院歌合歌　　つらゆき
八九　桜花散りぬる風の名残には水無き空に浪ぞ立ちける

『古今集』の春の部上下を合わせて全一三四首中、桜の歌は四一首[四]で、春の歌の約三割を占めている。そのうち上巻の二十首は咲いた桜を詠んでおり、下巻冒頭の六九番歌で「色かはりゆく」と散る気配を見せた後は、ひたすら散る桜が詠まれていく。開花から落花までの経過に沿って配列された桜歌群には、和歌配列に時間経過を適用した『古今集』の編集方針が見事に生かされている。

そのような桜歌群の中で、桜の初出である上巻四九番歌に「散る」という語（本文中の波線部）が、すでに使用されていることは注目される。『古今集』の桜は、咲いたばかりの花に対して、散るなよと祈る歌から始まっているのである。花盛りの桜に対して、散る事を前提に詠む歌も六二番歌以降に続いている。さらに、散っている桜に対して無茶振りをするのが八二番の紀貫之の歌である。桜が散るのを見ると心騒ぐから、いっそ咲かないでほしいと詠っている。『古今集』では桜は散るものという認識が決まり事になっていたことが改めて確認される。

ところで、このように桜の散り際を詠む『古今集』だが、その歌には決して悲愴感のようなものが感じられない。桜は散っても来年また花開くことが分っているから、「残りなく散るぞめでたし」（七一）、「散らば散らなむ」（七四・七八）と、今この時が過ぎ去ることに焦点をあてている。年をとって変わり（五七）、風が吹かなくても心移ろう（八三）のは桜でなく人間の方であることを平安人は意識している。散る桜に人の命のはかなさを例えるのは遥かに時代が下ってからのことになる[五]。『古今集』は、四季が移り変わっていく時間経過に着目し、それが最も華やかに現れる散り際の桜の美を描いたのである。

二　『枕草子』の桜

十世紀中頃の散文作品における桜の使用状況に目を向けると、『古今集』と関係の深い『伊勢物語』には用例が多いが、『蜻蛉日記』では梅の方が桜の用例数を上回る[六]。そして、『枕草子』『源氏物語』では梅と桜の用例数がほぼ同数になっている。平安女流文学が生まれた後宮に、王権と直結する勅撰和歌集が影響を与えるのは必然であろう。つまり最初の勅撰集である『古今集』が、王朝文学を代表する二作品に、桜への関心を喚起させたと考えられる。

『古今集』で好まれた桜は散文作品にどのように描かれていったのか。本稿では、『枕草子』の桜について検討していく。

①　おもしろく咲きたる**桜**を、長く折りて、大きなる瓶にさしたるこそをかしけれ。**桜**の直衣に出だし袿して、まらうどにもあれ、御せうとの君達にても、そこ近くゐて物などうち言ひたる、いとをかし。　〔二　ころは〕

②　「三月三日、頭弁の、柳かづらせさせ、桃の花を挿頭にささせ、**桜**腰に差しなどして、ありかせたまひしをり、かかる目見むとは思はざりけむ　〔七　上に候ふ御猫は〕

③　高欄のもとに青きかめの大きなるをすゑて、**桜**の、いみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いとおほくさしたれば、高欄の外まで咲きこぼれたる昼方、大納言殿（伊周）、**桜**の直衣のすこし

六三　今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや
　　題しらず　　よみ人しらず
六四　散りぬれば恋ふれどしるしなきものを今日こそ桜折らば折りてめ
六五　折りとらば惜しげにもあるか桜花いざ宿借りて散るまでは見む
　　きのありとも
六六　桜色に衣は深く染めて着む花の散りなむ後のかたみに
　　桜の花の咲けりけるを見にまうで来たりける人によみておくりける　　みつね
六七　わが宿の花見がてらに来る人は散りなむ後ぞ恋しかるべき
　　亭子院歌合の時よめる　　伊勢
六八　見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむ後ぞ咲かまし

【巻第二春下】

　　題しらず　　よみ人しらず
六九　春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色かはりゆく
七〇　待てといふに散らでしとまる物ならば何を桜に思ひまさまし
七一　残りなく散るぞめでたき桜花ありて世中はての憂ければ
七二　この里に旅寝しぬべし桜花散りのまがひに家路忘れて
七三　空蟬の世にも似たるか花桜咲くと見しま間にかつ散りにけり
　　僧正遍昭によみておくりける　　これたかのみこ
七四　桜花散らば散らなむ散らずとてふるさと人の来ても見なくに
七五　雲林院にて桜の花の散りけるを見てよめる　　そうく法師
　　桜散る花の所は春ながら雪ぞ降りつつ消えがてにする
七六　桜の花の散り侍りけるを見てよみける　　そせい法師
　　花散らす風のやどりは誰か知る我に教へよ行きてうらみむ
七七　雲林院にて桜の花をよめる　　そうく法師
　　いざ桜我も散りなむひと盛りありなば人に憂き目見えなむ
七八　あひ知れりける人のまうで来て帰りにける後によみて花にさしてつかはしける　　つらゆき
七九　ひとめ見し君もや来ると桜花今日は待ち見て散らば散らなむ
　　山の桜を見てよめる
八〇　春霞なに隠すらむ桜花散る間をだにも見るべきものを
　　心地そこなひてわづらひける時に、風に当たらじとて下ろし籠めてのみ侍りける間に、折れる桜の散り方になれりけるを見てよめる　　藤原よるかの朝臣
八一　たれこめて春のゆくへも知らぬ間に待ちし桜もうつろひにけり
　　東宮雅院にて桜の花のみかは水に散りて流れけるを見てよめる　　すがのの高世
八二　枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水の泡とこそなれ
　　桜の花の散りけるをよみける　　つらゆき
八三　ことならば咲かずやはあらぬ桜花見る我さへに静心なし
　　桜のごととく散る物はなしと人の言ひければよめる
八四　桜花とく散りぬとも思ほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ
　　桜の花の散るをよめる　　きのとものり
八五　久方の光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ
　　春宮の帯刀の陣にて桜の花の散るをよめる　　ふぢはらのよしかぜ
　　春風は花のあたりを避きて吹け心づからやうつろふと見む
　　桜の散るをよめる　　凡河内みつね

響が論じられている。また、本文分析の方向からは、『枕草子』初段に描かれる四季の景物と『古今集』四季歌の代表的な景物との違いが注目され、『枕草子』独自の表現方法の問題が論じられた[三]。

本稿では、それらの論について検討することはひとまず措き、王朝文学を代表する四季の景物について、『古今集』と『枕草子』での取り上げ方を比較検討していく。さらに具体例をもとに、景物の描写と作品の主題との関係について考察していきたいと考える。

その手始めとして、春の景物の中から桜を取り上げる。「桜」の語が表れる『古今集』と『枕草子』の本文を抽出して基本資料とし、それを基に検討していきたい。なお、本文引用は、『古今集』は『新編国歌大観』により、適宜、漢字表記に改めた。『枕草子』は『新編日本古典文学全集』によった。

一『古今集』の桜

春の花の代表といえば、日本では桜を掲げることにほぼ異論はないだろう。歌集に取り上げられる花の歌数で見ると、『万葉集』では梅が桜を大きく上回っていたが、『古今集』で逆転し、桜歌優勢の状況が後世にも続いていった。

次に、『古今集』春の部における桜の全用例を掲げる。

【巻第一　春上】

人の家に植ゑたりける桜の花咲きはじめたりけるを見てよめる
つらゆき

四九　今年より春知りそむる桜花散るといふ事はならはざらなむ
題しらず　よみ人しらず

五〇　山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそ我見はやさむ
又は、里遠み人もすさめぬ山桜

五一　山桜わが見にくれば春霞峰にも尾にも立ち隠しつつ
染殿后の御前に花がめに桜の花をささせ給へるを見てよめる
さきのおほきおほいまうちぎみ

五二　年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし
渚の院にて桜を見てよめる　在原業平朝臣

五三　世中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
題しらず　よみ人しらず

五四　いしばしる滝なくもがな桜花手折りても来む見ぬ人のため
山の桜を見てよめる　そせい法師

五五　見てのみや人に語らむ桜花手ごとに折りて家づとにせむ
花ざかりに京を見やりてよめる

五六　見わたせば柳桜をこきまぜて京ぞ春の錦なりける
桜の花のもとにて年の老いぬることを嘆きてよめる
きのとものり

五七　色も香も同じ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける
折れる桜をよめる　つらゆき

五八　誰しかもとめて折りつる春霞立ち隠すらむ山の桜を
歌たてまつれと仰せられし時によみてたてまつれる

五九　桜花咲きにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲
寛平御時の后宮の歌合のうた　とものり

六〇　み吉野の山辺に咲ける桜花雪かとのみぞあやまたれける
弥生に閏月ありける年よみける　伊勢

六一　桜花春加はれる年だにも人の心にあかれやはせぬ
桜の花のさかりに、久しく訪はざりける人の来たりける時
によみける　よみ人しらず

六二　あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人も待ちけり
返し　なりひらの朝臣

［研究ノート］

『古今和歌集』*と『枕草子』―「桜」の描写の比較から―

赤間　恵都子**

要旨

国風文化が花開いた平安時代、文学の中心は和歌であり、勅撰和歌集が次々と編纂されていった。そんな時代に歌人の家系に生まれた清少納言は、『枕草子』という新しい形式の文学作品を生み出した。最初の勅撰和歌集として権威的存在だった『古今和歌集』と、それを意識して生み出されたに違いない新しい形式の文学と、二つの作品にはどのような違いがあるのか、両作品が取り上げる四季の景物の扱い方を比較検討することで明らかにしようと試みた。その最初の題材として、本稿では春の代表的な景物である「桜」を取り上げ、両作品の「桜」の用例をすべて抽出し、その内容を比較検討した。その結果、散る桜を詠う『古今集』に対して、散らない桜を演出する『枕草子』という対照的な様相がとらえられた。『枕草子』は『古今集』の文学的価値を認める一方で、『古今集』に対抗した独自の世界を創り上げたと考える。『枕草子』においては、桜は后の象徴として用いられており、清涼殿と二条邸（中宮定子の里邸）に設置された満開の大きな桜は、決して散らせてはいけないものだった。したがって、『古今集』が散る桜をどんなに賞美しても、『枕草子』は散らない桜の世界を描きとめたのである。両作品の四季の景物について、さらに検証をつづけていく予定である。

はじめに

平安時代の国風文化の中心となったのは和歌であり、最初の勅撰和歌集として後代の模範的役割を果たしたのが『古今和歌集』である。古今風といわれる高度な表現技巧、繊細優美な作風、そして理知的な主題は平安時代のあらゆる文学に影響を及ぼし、王朝文化隆盛の基盤となった。

隆盛期の王朝文学を代表する『枕草子』は、『後撰和歌集』の撰者を父に持つ後宮女房の作品である。すなわち清少納言の父清原元輔は当代を代表する専門歌人であり、それは清少納言が後宮に召された第一の理由だったと考えられる。『枕草子』の文章からは、歌人の血筋を意識しプレッシャーを感じながらも独自の文学分野を切り拓いていこうとする作者の意気込みが読み取れる。『枕草子』がそれまでにない散文形態で書かれているのも、著名な歌人の娘としての自負が反和歌的表現を志向したためと見ることができるだろう。とはいえ、和歌と異なる形式を求めること自体が和歌を強く意識していることに他ならず、『枕草子』が当代和歌文化の権威であった『古今和歌集』（以下、『古今集』と表記する）の影響を受けていることは言うまでもない。

両作品の関わりについては、具体的な歌語摂取の指摘以外にも、『古今集』が有する政治的役割を『枕草子』が取り入れたと見る論[1]や、『古今集』が創り上げた時間の断章を『枕草子』が詩的手法として選択したとする論[2]など、『古今集』が『枕草子』に与えた全般的な影